参考－２

第5回神戸川の河川環境に関する専門委員会　意見発表要旨

【日　時】 平成24年12月5日（水） 14:00～16:35
【場　所】 朱鷺会館　1階　大ホール
【発表者】 深井　徹郎：神戸川来島ダム水利等調整委員会（委員）
岩﨑　知久：NPO法人しまね体験活動支援センター事務局長
林　　要一：神戸川再生推進会議会長
松尾　治幸：神戸川漁業協同組合参事
小川　弘知：長浜自治協会会長（当日は欠席、メモを事務局より代読）
【内　容】

■深井　徹郎　氏

（発表内容）

○昭和36年から農業をやりながら共に生きてきた。来島ダムのことは非常に関心を持っている。

○中国電力の来島ダムの運用の仕方、私が所属している神戸川水利等調整委員会の県の事務局としてのあり方について、様々な意見を申し上げたが、私の声はほとんど届かずに今日を迎えている。

○来島ダムは発電用ダムなので洪水調節はできないと随分聞かされ、水害により水田を何度も河原にしてしまったという思いがある。

○随分水質が悪くなった。アユ漁をしているが、ここ十数年で魚が取れなくなったためそのことは明らかである。そういった面も含めて、ダムの無い川にしたい、また、水害の無い川にしてほしいということで、志津見ダムの実現については私にとっては待望である。志津見ダムができたからには、60年の江の川の分水による水力発電の時代は終わっていただきたい。

○三隅の火力発電所100万キロワットで島根県の電力は賄えると聞いている。

○乙立発電所については、中国電力から日量1万m3/s を減水区間に流すと聞いていたが、資料にある0．0059m3/s は半分にしかならない。

○来島ダムの堆砂量について、調査地点では10m近い堆砂量になっているため、考えていただきたい。

○来島ダムの水は全面的に返していただく。志津見ダムには水質調査を徹底的に行っていい水を流していただきたい。

■岩﨑　知久　氏

（発表内容）

○最も重要な問題として、水質の保全・改善に取組んでいただきたい。発電減水区間も含めて今の水量では本来川が持っている浄化能力といった自然の力を十分に活かし切れていない。

○ダム水の水質も改善が必要である。

○攪乱頻度の減少は、ダムを作った時点で分かっているはず。ダムの管理に関しては、そういったことを考慮してどれだけの水を流すのかを検討しているのではないか。ダムから流す水量の調整も可能ではないかと思う。

○全窒素が基準値を超えているが、これらは人間の社会生活の中から排出されている。この委員会がきっかけとなり、流域住民全体で富栄養化物質を減らし、川の水質をよくしようという方向に繋がっていけばいいと考える。

○私たち大人の取り組みとして、川への関心を高めていくことも必要である。神戸川百景フォトコンテストや一斉清掃活動など、私たちにできることを取り組んでいきたい。

○発電減水区間を含めて、「河川環境の保全」が盛り込まれた平成９年改正の河川法の趣旨にのっとり、どの様に河川を管理していくべきか検討していただきたい。

○河川水の供給源であり緑のダムと言われる流域の山林の環境にも心を配っていくべきである。

○「自然は未来からの借り物である」と言われている。子どもたちが望んでいる「多様な生き物が生息できるきれいな神戸川」にしてほしいというメッセージは、未来からのメッセージである。
汚れた川のままで未来にバトンタッチしてはいけないという気持ちで検討していただきたい。

■林　　要一　氏

（発表内容）

○本来神戸川の流域に流すべき水であるため、他の流域に流すことは認められない。

○調査の中に溶解性シリカの調査が行われていない。斐伊川では行われているが、神戸川は行われていない。溶解性シリカは、アユの餌と密接に関係があるため、調査対象にしていただきたい。

○農業用水が確保されているとあるが、長浜、神西地区のかんがい用水は不足している。不足分は生活下水で補っている。必ずしも水量が確保されたとは言えない。

○八神地点で昭和62年2月1日から、平成23年12月31日までの9，100日間において、流量データの記録が不明の日数が1，224日間あった。こういった状況だと、八神で0．8tが本当に流れているのか疑問。

○また、来島ダムの水質調査について、毎月調査すべきものが1年おきに調査をされている。我々沿川住民は、河川施策については行政を信頼しているのに、この様な不詳な行為が行われていたのは住民への裏切り行為である。信頼性が崩れれば、我々は何を頼りにすればよいか分からない。

○我々も、水量・水質・環境・土砂供給について検証しているところ。引き続いてこの委員会を継続してほしい。

■松尾　治幸　氏

（発表内容）

○概ね水量・水質は満たしているとの報告書素案の内容は理解しがたい。水量・水質の河川環境に問題があるから、こうした専門委員会で協議しているのではないか。何故そうなるか。それは今、神戸川の現場でおきている現象やシーンをデータで捉えていないからではないか。

○水量の問題では、窪田、八幡原でおきている維持流量のない状態が水の収支データで表れていない。河川には支流からの流入、利水の取水、地形の状態と変数要因が沢山あるのにもかかわらず、二地点で良ければ全てを満たしていると評価しているからそうなってしまう。

○堰堤により河川に連続性がないと言う事は、資源増殖の為には海を必要とする鮎、鰻、山女、モクズガ二にとっては致命的な事だ。

○水質もそうだ。黒い水が現象として表れているにもかかわらず、環境基準で評価し、概ね満たしているとしている。

○又、釣客の減少、鮎が臭くて料亭で使えない等のシーンは、このデータには表れていない。

○報告書素案に内容を見ると、神戸川の水に関する期間比較しか行われていない。検証や分析を行う際、「神戸川のあるべき姿」に基づいて、高津川、江の川、斐伊川、日野川といった近隣の河川との相互比較、全国の河川との標準比較も行って欲しい。

○又、水量と資源量との関係、将来発生してくると思われる不安や脅威も専門家先生の知見で明らかにして欲しい。

○最後に、水量・水質の問題を検討するあたり、実際にどうなか、机上で判断すえるのではなく、水を流して検証すべきではないか。

■小川　弘知　氏

（発表内容）

○最下流部では中小河川が日本海へスムースに流れるかどうかに最大の関心がある。洪水時に少しでも神戸川に余裕があることが一番の願い。

○適時的確な水質調査の実施と公表を希望。

○農業者から「用水が不足している」との声は、聞いていない。

○河口閉塞は触れられていないが、生態系に与える問題は無いのか。

○水質をよくするため、問題の無い時期に、ある程度の水量を流すことは出来ないものか。